

受賞作品

# 近代アジア市場と朝鮮 開港・華商・帝国

石川亮太著  
名古屋大学出版会 525 ページ、7200 円（税別）



書評

## 朝鮮交易史 浮かぶ市場の論理

政策研究大学院大学特別教授 杉原薫

本書は、朝鮮の開港から第一次大戦期までの朝鮮交易史をテーマとする優れた実証研究である。朝鮮華商（朝鮮在住の華僑）によって形成された東アジア商業ネットワークと商品・通貨の広域的な流通システムを描くことによって、著者は「近代朝鮮の国際的契機」とも呼ぶべき歴史的文脈の存在を明らかにする。

すなわち朝鮮は単に清国、日本、ロシアという 3 つの帝国の圧力に苦しんだだけでなく、ソウルや開港場における日本人商人、華商、朝鮮人の仲介商人の活動を通して、近代アジア市場の一翼を担っていたのである。

また著者は、既存の朝鮮史などの研究成果を評価しつつも、日本による植民地化を到達点としたテーマ設定や、その視野を朝鮮国内に限定したこれまでの商業史の叙述に満足せず、近世からの制度や流通ネットワークとの連続性を丹念に掘り起こすと共に一次資料である「同順泰文書」にあたることなどを通して、上海、香港、神戸と朝鮮諸港を結ぶ多角的貿易決済網を示そうとしている。

そこから日本が作った近代的な金融やインフラをも活用しながら、国境を超えるビジネスチャンスをつかえようとする動きが盛んだったこと、市場の論理が働いていたことを浮かび上がらせることに成功している。

直接のウエスタンインパクトを強く受けなかった朝鮮の交易活動をアジア交易圏論とグローバル経済史の文脈で読み解いたことは、本書の大きな貢献である。